



—人間は、ばらばらになって草むらの奥に転がり込んだひとつひとつのクレヨンを積み上げては、元の場所に戻して行きました。

そのときアイは、自分の横に自分と違う色をしたクレヨンがあることに気がつく。その鮮やかな色に少し戸惑いながら…でも、思い切って尋ねてみました。

「キミ…、とてもキレイな色だね。なんていう名前なの？」

「えっ、私。…それ本当？」

「んー、…とってもきれいだよ」

「それはどうも…。私は黄色よ。貴方だっってもっても素敵な色だわ、—青色さん。」

「エッ、どうして、…それって僕の名前なの？」

「人間が呼んでいる名前よー。私にもその意味は分からないわ。ただそう呼ばれるからそう呼び合っているの。—黄色のおチビさんとか、黄色のメタボさんとか、黄色のノッポさんとか。…あなたは青色の新米さんね」

「ぶわーん…そうゆうことなの。と」ろで、…一つ聞いてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「キミは、クレヨンに生まれてきて幸せですか？…それとも、やっぱり、辛抱しているの？」

「エーッ！なんでいきなりそうゆうこと聞くのよー」

「—だって、みんな我慢しているって。さっき小さいクレヨンに言われたから…」

「ああ…、青色のおチビさんでしょ。いつもぶつぶつ何を言っているかと思ったり、そうゆうこと…。でもそうよ。当たり前でしょ、そんなこと—」

「なぜ？—なぜなの—」

「だって…見てよ私なんか。あなたがほんのちよつと触っただけで汚れてしまうのよ！。…別にあなたに文句を言っても始まらないことだけど。私…本当はもっと自由でいたい。なのに人間たらわたしの気持ちなんか全然考えてくれずに、汚してばかり—。楽しく動き回ったり、大好きなダンスすら踊らせてくれないの。わたしのやって欲しいことなんて、一つも判っちゃくれない！。—それが苦しみでなくて何なの？」

その時でした—、

黄色の話聞いていた緑色のクレヨンが言いました。

「まあ—まあ—まあ—、穏やかに穏やかに、—黄色さん。そんなに目くじらを立てると素敵な貴女が台無しですよ。私たちは、こうやっていても人間の役に立っているのですから…それで幸せなことじゃありませんか。人間にうまく使ってもらえないからといって八つ当たりしていたら、自分が損なだけですよ—」

「んまあ—、なんですって！あなたはいいわよあなたは！あなたなんか、他の誰かに触られたって自分と大差ない色が増えるだけで、汚れる辛さなんて、ちっとも判っちゃいなくせに！」

「—そんなことありませんよ…わたしだって、いろいろ言いたいことがあるけど我慢しているんです。」

「ウソ！あなたなんかにわたしの辛さが解るもんですか！。だからそんなこと言えるのよ。私なんか…いつも自分でも自分が判らなくなるまで汚されているんだから—。人の身にもなってよっ！」

とうとう…黄色は泣き出してしまいました。

新米のアイは、自分のせいで黄色が汚れてしまうことを知り、胸が苦しくなるのを覚えました。

『…そうか、あの小さなクレヨンが、こういうことを言っていたんだ…』

—続いて聞こえてきたのは別の声でした。

「黄色さん、泣かないでー。あなたの苦しみはわたしが包んであげるからー。貴方がたは、みんなそれぞれに美しい色なのに…。黄色さんー、あなたはあなたのその色であるから青色さんとの間に緑色さんを生み出し、赤色さんとの間にオレンジ色さんを生み出すことができるのです。…あなたはその姿であるから、他のクレヨン達にとって善いことをしてあげることができるのです。それは、緑色さんにしても同じこと。—緑色さんは、あなたが生まれたことで、赤色さんとの間に土色さんが生まれてくることができるのですから…。そうやって、貴方がた全ての色がお互いを支え合って私たちが色の世界いは成り立っているのですからー。」

それは、クレヨン達の間で、親しみを込めて「お母さん」と呼ばれている赤紫色パープルの声でした。

「すると今度は、辺りがパツと燃え上がるように明るくなったかと思うと、そこに轟く声がありました。

「そうーそうー…そのとおり。」

みんなそれぞれに個性があるから、世界はまーるくなるのさ。

それぞれに違いがあるから交わり合えるのだよ。

そうやって世界は、深く、美しく磨かれて行くのだからー。」

そう言ったのは、輝く炎のような色でした。

アイはその姿に思わず息を呑みました。その姿には威厳があり、他のどんな色にも勝るエネルギーと、圧倒的な存在感がありました。

「あ、あなたは…」

アイは、恐る恐る尋ねました。

「わたしかい。…わたしの名は、赤だよ。」

わたしは全てのクレヨン達に、その存在の意義を告げ知らせる者。…只、わたしに近づきすぎると火傷をするからね。

そこには、くれぐれも気をつけるんだよ。

おやー、そろそろお迎えのようだね。

それじゃーみなさん、また後でー」

そう言うと、赤は人間の手に摘み上げられて、みんなの前から居なくなってしまうました。

続いて緑や他の色も居なくなり…草むらには泣きべそをかいた黄色とアイだけが取り残されました。



『ごめんよ黄色さん…、僕、本当にそんなつもりじゃないんだ…』アイがそこまで思ったとき、
黄色も摘み上げられてアイの見える前から居なくなってしまうました。
黄色は、見えなくなるまで…じっとアイを見ておりました。
そして、アイだけが草むらの中に取り残されてしまいました―

「オーイ！僕だけを置いて行かないでー！」
しかし…そこにはアイの声だけが、虚しく響くだけでした。